

「働く」をつなぐPBL

COLUMN
県内
大学発



皆さんは、「PBL」という言葉をご存知でしょうか？ PBLとは、アクティブ・ラーニング(active learning)の学習方法の一種で、問題解決型学習(Problem Based Learning)または、課題解決型学習(Project Based Learning)の略称であり、学習者が問題を見つけ、問題に対して知識を組み合わせて解決へと導く能力を養うことを目的とする実践的な学習方法で、近年、大学をはじめ、小・中・高校の教育現場で広く取り入れられています。

それでは、日本の大学においてPBLはこの程度実施されて

いるのでしょうか。文部科学省の調査によつて、大学におけるPBLの実施状況が明らかにされています。この調査の中で、PBLは「大学と企業等で連携して実施する、企業の問題解決や製品開発等を題材とした授業科目」と位置付けられており、2021年度の調査では、回答した大学(752校)の約42%に当たる319校が授業でPBLを「実施している」と回答しています。

PBLの起源は、1960年代、カナダの大学の医学部で、座学で身に付けた知識やスキルが臨床の現場で生かされていない

埼玉学園大学 工藤 悟志
経済経営学部 准教授



いことに気が付いた教授らが実践した学習方法といわれています。学生は模擬患者の治療計画を立てグループで討論を重ね、主体的に探究を進めていった。つまり、医学の教育現場で「学ぶ」と「働く(診療する)」をつなぐ学習方法が、PBLの始まりだったわけです。

では、現代の日本の大学で行われているPBLはどのような学びなのでしょう？ 近年、大学基準協会の大学評価結果においても、PBLを取り入れた特色ある教育が「教育課程・学習成果」の項目で長所として取り上げられる例が増えてきています。実際に大学で行なわれているPBLの共通点は、①企業・実社会と連携した学びである②学生がグループで協働する③課題に取り組み過程で、問題解決能力・協働する力など、さまざまな能力が身に付く、ということです。まさに社会の入り口である大学において「学ぶ」と「働く」をつなぐ学習方法として実践されているといえます。

近年、ChatGPTなどの生成AIが普及し、人間はそれらに仕事を奪われるのではないかとわれています。AIにはない人間の強みとして、問題を見つめる力、主体的に課題を解決する力、協働する力がより一層求められるのではないのでしょうか。知識の習得よりも、その知識をどう活用するかが問われている今、高等教育におけるPBLによる学びは、ますます大きな役割を担っていくことになるでしょう。

＜プロフィール＞ 一橋大学大学院商学研究科博士後期課程。上場企業、外資系経営コンサルタント会社でビジネスを実践。東京大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所(AIST)などを経て、2023年4月より現職。文部科学省科学技術・学術政策研究所客員研究員、東京外国語大学、上智大学などで非常勤講師を兼任。学術研究を生かした経営コンサルティング、企業研修も手がける。専門は経営戦略、経営管理、イノベーション・マネジメント、事業創造。